

会場では、介助犬ユーザーの方も多く見られましたが、やはり訓練されている介助犬だと思ったことがいくつかありました。ユーザーが物を落とした時に介助犬がすぐさま拾うこと、歩くスピードをユーザーのことを何度も見て合わせていること、周りの犬が鳴いていたり、うるさくなっていてもまったく動じないこと、他にもたくさんありますが、介助犬のすばらしい仕事ぶりを実感しました。

今回、介助犬総合訓練センター ～シンシアの丘～ に見学をさせていただきました。そこでは介助犬と共に生活ができる部屋や、犬を育成・訓練するスペースなどを見学しました。以前、皇族の方がお見えになられたとのことで、それがニュースにもなり補助犬（介助犬・聴導犬・盲導犬）への認識が広まったそうです。

私は家に犬を飼っています。介助犬と比べるのはどうかと思われませんが、しつけは大変です。介助犬の現在の74頭という数字を見ると、介助犬の育成・訓練は非常に難しいものだと感じています。さらに、介助犬を必要とする人数を見ると、これからの育成・訓練にぜひ国をあげて動いて欲しいと感じました。

第一事業部 渡辺 大樹



介助犬PR犬 兼「リニモ駅長」  
オーシャン

### 【ボランティア活動】

介助犬は基本的に吠えないよう躡けられています。今回見た場面は吠えているところでした。共にその様子を見ていたボランティアの方が「毎年フェスタに参加しているが、初めて見た。まだ介助犬の訓練中なのではないか」と話していたほど珍しい光景でした。介助犬の訓練は約1年かけて行われ、電車や施設など様々な状況に慣れさせていきますが、普段と違い多くの犬が集まっているという今回のような特殊な状況下でも、吠えないよう教えていくのは時間もかかり大変だと感じました。

### 【「シンシアの丘」見学ツアー】

「盲導犬」については、私の地域では小学校・中学校などでイベントがあったため知っていましたが、「介助犬」については全く知りませんでした。「シンシアの丘」のある長久手市では小学生の頃から必ず訪れるようにし、県内の認知度がほぼ100%近くなっているといいます。見学ツアーでは、普段の様子や、介助犬を取り巻く環境・世相の歴史を学び、また介助犬の頭数が74頭と、盲導犬が984頭に対し、かなり少ないことを知りました。

より多くの人たちに介助犬について知ってもらい、介助犬を皆の力で育てていく環境にしたいと強く感じました。愛知県へ訪れる際は是非「シンシアの丘」を訪れてほしいです。

第二事業部 柳本 真央



催し物で賑わうフェスタ会場内

## 介助犬フェスタ内の見学

フェスタ内ではステージの催しや、愛犬似顔絵、車椅子体験などがありました。私は車いす体験が気になっていたため、ボランティア後に車いす体験の申し込みに向かいました。しかし、体験の参加人数が既に満員だったため、体験は出来ずに終わってしまいました。会場内では、車いすバスケットボールもやっており、車いすに乗りながらもあんなにスムーズにパスやシュートが打てるのに驚きました。バスケットボール後に小学生の子たちが、車いすを使った鬼ごっこをしており、そちらとバスケットボールの動きを比較するとあのように動かすようになるには慣れが必要であるとの感想を持ちました。

## 介助犬訓練センターの見学

訓練センターでは介助犬の部屋や、介助犬との生活を体験できる部屋の見学をしました。見学前までは訓練センターに対して、あまり良いイメージがなかったのですが、全体的に開放的なデザインであり、部屋の中は明るい色を使用し、犬たちの部屋もきれいであり、私が思っていたイメージとは全く違っていたのが印象的でした。

第二事業部 小村 幸浩



介助犬認定報告会の様子  
新たなペアが誕生

今回のイベントを通して、私の先入観は大きく変わりました。イベントでは人と介助犬が仲良く参加し、子供から大人まで、そして体の不自由な人も共にイベントを楽しんでいる様子がとても印象に残りました。

私達が担当したボランティアはアロマスプレー作りの体験イベントの手伝いでしたが、そこでは車椅子の方々も介助犬の助けを借りて、何の不自由なく、楽しくイベントに参加していました。介助犬も時に体の不自由な方を助け、時にイベントに共に参加している方々を和ませるといった、介助犬ならではの役割をきちんと果たしている様子を見て、私自身も和ませていただきました。

まず、私達にできることは、介助犬というものの存在を知ることだと思いました。例えば、普段の生活において利用している道路や建物で介助犬を見かけたらと考えると、介助犬のことをあまり分かっていない、以前の私なら少し驚いていたかもしれません。また、現代の多くの人にとっては、それが普通の反応かと思います。今後、介助犬が世の中にさらに広まり、人と介助犬が何の違和感もなく、現代の社会において共存していけるようになってほしいと思いました。

第二事業部 我妻 和憲



アロマオイル作成イベントのお手伝い

日本介助犬協会様の活動（介助犬ユーザーへの無償サービス提供など）は、全て寄付によって成り立っている。中には遺贈という形での支援をされた方もいる。またシンシアの丘施設内や介助犬フェスタ2016の会場には、介助犬の育成・普及を呼び掛ける募金箱が数多く設置されていた（左図参照）。このように寄付によって協会の活動が支えられていることは、介助犬の認知・理解が広まった証の一つであると言えるのではないかと。

しかしながら2016年1月時点、認定を受けた介助犬は74頭という現状に対して、現在日本では約1万5千人が介助犬を必要としている。多くの介助犬の育成が必要とされているのである。ついてはこの度のような支援活動が積み重なり、介助犬の認知・理解が更に広まり、そして介助犬の育成が促進され、肢体不自由者の生活が支えられていくことを切に願うものである。

オムロン事業部 小金丸 琢也



介助犬へのご理解とご支援をお願いいたします